

# 架け橋期の主体性を育み、 幼稚園で培った力が、入学後も発揮されるために ～本巣市版「幼小架け橋プログラム」における歩み～



本巣市教育委員会 学校教育課・幼児教育課

## 1 はじめに

本巣市は、市内小学校・義務教育学校に入学する約95%の児童が校区の幼稚園（保育所+幼稚園）の卒園児のため、幼小の交流活動や引き継ぎが行いやすい「強み」があります。その「強み」を生かし、入学時に学びをリセットするのではなく、幼稚園で培った力を入学後も発揮できる教育・保育を行うために、令和5年度から幼稚園・小学校・教育委員会の代表者で編成する「幼小接続改革チーム」を組織し、架け橋期の課題を分析、双方の交流活動や研修会等の成果を検証するとともに、互いの教育の在り方を問い直し、幼小教職員の質の高い学び合いや幼小連携の充実を図ってきました。

本巣市教育委員会では、本市の教育が目指す人間像「ふるさとをルーツに、未来を切り拓き、たくましく生き抜く人間」の基礎を培う架け橋期（義務教育前後の5歳児から小学校1年生の2年間）の教育・保育と幼小連携の更なる充実のために、幼稚園や学校の先生方とともに、具体実践を重ねています。

## 2 架け橋期における本巣市の「問い直し」から「目指す教育・保育・連携へ」

### 架け橋期における本巣市の「強み」

- 市内小学校に通う児童の95%が市内幼稚園の卒園児
- 幼稚園と小学校との交流活動の充実
- 特別な支援に関わる幼小間の引き継ぎの充実
- 幼稚園への小中教員の派遣
- ACP（運動プログラム）や英語活動、食育等、健全育成に関わる幼小の取組の充実

### 架け橋期における本巣市の「課題」

- 幼小の互いの子供観の共通認識の不足や互いの実践への理解不足
- 引継内容が小学校内で共有されていない事例（「〇〇さん立ち歩きますが・・・」）
- 新1年生の登校しぶり（平均で各校数名）
- 幼小教職員の対話によるカリキュラム（アプローチ・スタート）の改善及び実践



### 幼・小 教育・保育の「問い直し」

- ・一人一人の発達を捉えているか。
  - ・子供の「願い(心の声)」を聞こうとしているか。
  - ・子供の不適応は本人の発達や家庭の問題か。
  - ・画一的、型にはめる指導になっていないか。
  - ・指導に幅はあるか。厳しすぎる指導ではないか。
- ※主体的に楽しく活動してほしいと教師は願っているのに・・・

やはり、子供達の主体性が根幹である。小学校は達成目標であるため、「分かる・できる学び」「学びの充実」は、必然である。子供の目線に立って、幼児が夢中になって、遊んだり、探求したり（もっとやりたい!・知りたい!）するような主体的な姿を小学校においても目指したい。〈「架け橋プログラム検討会」にて〉

### 目指す教育・保育

#### I 「やりたい!」を引き出す工夫

面白そう・できそう・もっと知りたい

教師の願い = 子供の願い

教育・保育の目標に向けた意図的な工夫のある実践を積む

#### II 培った力が発揮できる接続

リセット型

積み上げ型

これまで

小1

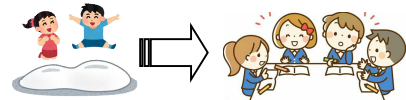
これから

幼児期

途切れることのない学び・生活の接続へ

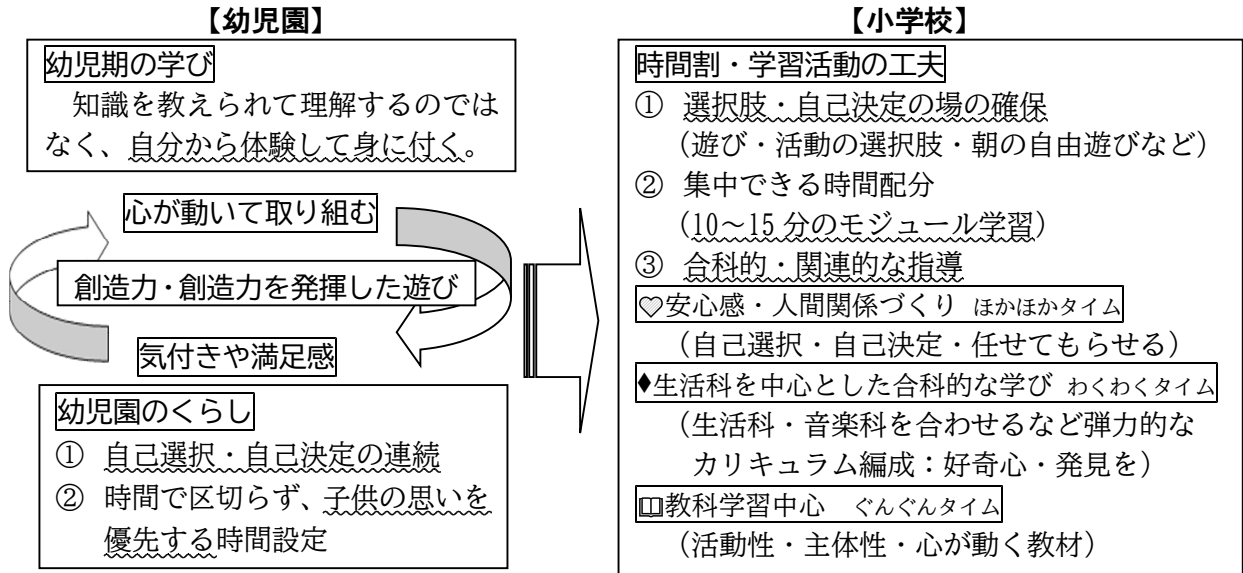
### 3 具体実践

#### (1) 「やりたい！」を引き出す工夫



##### ① 「学びの連続性」を確保するための教育・保育の分析

幼小架け橋プログラム検討会において、幼稚園と小学校の学びの違いを具体化し、その段差を緩やかにするためのポイントを検証し、市内幼・小・義務教育学校と共有しました。



##### ② 幼・小互いの保育・教育の意図を学ぶ場の確保

幼稚園で育んだ「心情・意欲・態度」を入学後の「主体的な学び(やりたい)」につなげるため、小学校1年生の担任教諭が、幼稚園での体験型研修に参加しました。また、年長組の担任教諭が、1年生の授業補助体験を行うなど、幼児児童の指導・支援に携わりながら互いの教育・保育を学び合いました。



幼小教諭の合同授業検討会

#### (2) 幼稚園で培った力が発揮できる接続

##### ① 幼児教育を踏まえた小学校の授業づくり

市内の幼稚園と小学校の教諭が合同で、「幼児教育を踏まえた小学校の授業の在り方」について「合同授業検討会」を行いました。今年度は、「生活科」と「音楽科」の授業づくりに取り組みました。教科の内容に即した幼稚園での体験や活動欲求の大きい幼児の興味関心などを共有することで、幼稚園の「遊びの要素」を小学校の「主体的な学び」にレベルアップした授業づくりを行うことができました。



真正幼稚園と真桑幼稚園の交流

##### ② 幼小・幼幼の交流・連携

年間を通じて、幼小、幼幼(同じ小学校に入学する幼稚園同士)の交流活動を計画的に仕組み、幼児と児童、幼児と幼児、教職員同士がつながり、入学への安心感・期待感を高めています。

### 4 おわりに

本市での幼小連携の「強み」を生かすための取組は、学校と幼稚園の子供観や教育・保育における「学びの連続」につながっています。子供の内なる力は、体験することで培っていくものと捉えます。取組の成果は、子供が教えてくれます。

本県市教育委員会は、今後も架け橋期の教育・保育・連携の最善解を求め続けます。